

翻訳過程における学習者の「葛藤」の記述

— G. Byron “When we two parted” を題材にして—

石原知英

(広島大学大学院教育学研究科)

This study aims to describe students' battles in the poetry translation. In the study, six university students were asked to translate Byron's poem "When we two parted". Their retrospective verbal reports were collected through the interview and then analyzed. The result shows that the participants stopped at the first two lines of the poem, where some remarkable parallelisms of the rhythm, rhyme, and sentence structure are salient, and struggled to translate the forms of the source text. Also some distinctive features of the poetry translation, such as source text orientation and conscious awareness of the genre and style, are revealed. These struggles and battles during poetry translation will contribute to enhance students' language awareness.

1. はじめに

本研究の目的は、英語学習者が詩を翻訳する際に生じる葛藤の様子を、記述的に明らかにすることである。そうすることで、翻訳研究の立場からは、そのプロセス研究の一助となることを目指し、また、英語教育の立場からは、翻訳というタスクにおける言語意識の高まりを明らかにし、そのタスクの再考に資することを目指している。

翻訳に際して学習者は、その明示的な2言語の比較を通し、理解と産出の間に生じる言語文化的な葛藤に直面する。そこで学習者は、ことばそのものの構造や働きの共通性や違いに気づき、またことばにこだわりながら訳すことを迫られる。そうした経験を通して、学習者の言語意識が高められるのである。この点は、Zabalbeascoa (1997)によっても、“translation practice can be used as a resource for the promotion of language learning and as such many activities and exercises can be used to develop language awareness” (p.122) と指摘されている通りである。そういう意味で翻訳は、言語意識の観点から、言語教育に資するタスクとして再考の余地があると考えられる。

そうしたことばへのこだわりの惹起、あるいは言語意識の高揚については、詩など

ISHIHARA Tomohide, “Describing students' battles in the poetry translation: A case study of Byron's “When we two parted”.” *Interpreting and Translation Studies*, No.9, 2009. pages 235-251.

の文学的なテキストを訳すという場合、よりその度合いが強まるのではないかと考えられる。なぜなら、詩は「表出機能」(ビューラー, 1934/1983) が優勢なテキストの代表格であるためである。Reiss (1981/2004) が指摘するように、表出的なテキスト (Expressive text) を訳す場合、その表現の方法の同一化が優先され、その表現の解釈によって訳すというモードが取られやすいが、その場合、原文テキストの表現の方法、すなわち言語形式へ翻訳が志向するため、翻訳不可能性が前景化され、葛藤の度合いが強まるのである。すなわち、原文テキストのスタイルを含めて訳出しようとするところに翻訳の葛藤 (Decisive battles) が生じると考えられる。

翻訳は、理想的には理解と訳出の両側面を想定することができるが、現実的には同時的なプロセスであり、行きつ戻りつという螺旋的なプロセス—理解、訳出、修正が不断に繰り返されるプロセス—を経る。本研究で目指すのは、詩の翻訳における2言語間の葛藤状況において、翻訳者(学習者)の思考過程でどのような「ことばへの気づき」が生じるのか、という点に関する記述である。そうした気づきとテキストの特徴との相互作用を考察し、どのような気づきが、どのような箇所で、どのように引き起こされるのか、明らかにしようとする。

2. 目的と方法

2.1 目的

本稿の目的は、詩の翻訳プロセスにおける翻訳者の葛藤の様子を、記述的に明らかにすることである。具体的には、以下で詳述するように、バイロン (G. G. Byron) の “When we two parted” (1808) という詩を題材とし、大学3年生6名に翻訳課題を与え、その内観報告によって翻訳プロセスを記述する。

2.2 協力者

協力者は、教育学部に所属する6名の大学3年生であった。教員免許状取得のため、授業等で英文学に触れる機会はあるが、全員が英文学専攻ではなく、また専門的な翻訳の経験を持たず、その訓練も受けていなかった。比較的長時間に及ぶ課題に取り組むことや、インタビューでリラックスして話す必要があることを考慮し、調査者の知り合い(後輩)に依頼し、協力を得た。なお、6名のTOEICの平均は834.2点(標準偏差43.7点)であり、テキストの語彙レベルなどを考慮すると、テキストの理解は十分に可能であろうと考えられた。

2.3 テキスト

テキストは、イギリスのロマン派詩人であるバイロンの “When we two parted” を用いた。テキストは付録1を参照されたい。この詩は4連から構成されており、脚韻やリズム、改行なども定型的で、一見して詩と分かるテキストであった。語彙のレベルや文の構造も比較的容易であり、内容の観点からも、普遍的なテーマである別れの悲哀を描いたものであるため、一般的な読者である大学生にとっても十分理解可能で、

適切な題材であると考えられた。また、全体の長さも比較的短く（全体で 144 語、課題範囲は 33 語）、協力者は十分に集中して課題に取り組むことが可能であったと考えられた。

2.4 データの収集

データの収集のため、一人ずつ部屋に来てもらうという面談形式での調査実験を行った。

本研究の趣旨などを説明した後、まず全文を提示して 10 分間の内容理解の時間をとった。その後、第 4 連のみを訳すように指示した。その際、第 4 連のみを拡大コピーした用紙を 2 枚（下書き用と清書用）手渡し、「この部分を訳してください」と指示した。協力者がタスクを遂行している横で、調査者は、ビデオカメラによってその手元を撮影した。その際はなるべく邪魔にならないよう配慮した。なお、翻訳課題遂行に際して、協力者は自由に辞書を使用することができた。時間制限も設けなかった。なお、6 名の協力者の平均課題遂行時間は 14 分 17 秒であった。

分析の対象となる内観の収集には、刺激再生法を援用した回顧法を用いた（詳しくは Garner, 1988 や Sasaki, 2000 などを参照されたい）。回顧法とは、課題遂行後に協力者自身にそのときに考えていたことを思い出しながら語ってもらうことで、課題遂行時の思考過程を記述しようとするものである。本調査では、記憶再生の手がかりとして、課題遂行中に撮影されたビデオカメラの映像を用いた。具体的には、協力者と共に、課題遂行中に撮影した映像を見ながら、課題遂行中に立ち止まって考えている箇所、訳を修正している箇所、辞書を引いている箇所、訳を飛ばしている箇所、何度も読み返している箇所などで、逐一ビデオを止め、何を考えていたのかを尋ねていった。そうして協力者の内観による言語報告を収集し、ボイスレコーダで録音した。その後、音声データをすべて文字起こし、分析の対象とした。なお、データの総量は 42,631 文字であった。

2.5 データの分析

データの分析は、質的研究の手法を参考に、まず全てのプロトコルデータに対して、以下のような分析シートを作成した。シート中の発話者の欄の R は調査者 (Researcher) を、A は協力者の 1 人である協力者 A を示している。このシートをもとに、協力者の発話から、どのような箇所でどのような気づきが生じているのかを、記述的にまとめた。

なお、以下の結果の中で提示される分類は、あくまでこの調査の協力者 6 名の内観から得られたものであり、確定的なものではなく、またそれぞれの分類も厳密には重なり合う部分があると考えられる。それでも、こうした分析を行うことで、本調査で用いた詩の翻訳プロセスを分かりやすく記述、提示することができると考えた。そうしてまとめたデータに対して、テキストの仕掛けと読者の読みの両面をつき合わせ、質的な検討を行っていった。

発話者	発話	箇所	鍵概念
...
R4	そのあと 2 文目、In silence I grieve まで読んだ後に、そこでまたちょっと読んだ後に考えてるんだけど、2 文目読んだ後は、何を考えているんですか？		
A4	Grieve の意味がちょっと分からなかったので、どういう意味かなって推測しようと思ったんですけど、まあ、でも辞書を引こうかなと思いました。	Grieve	語の意味 推測
R5	その後 3 文目、That thy heart could forget まで読んだ後、に、またちょっと考えているんだけど、その 3 文目を読んだ後は、何を考えているんですか？		
A5	3 文目、読んだ後は、あ、たぶん、うん、何考えているかな？あ、たぶん、Grieve that、that、grieve that って、said that みたいな、Told that とかの、that かなあって思って、で、先にやっぱり grieve を(辞書で)引こうと思って、で、grieve を引きました。	Grieve that	語のつな がり
...

図 1 分析シートの例 (抜粋)

3 結果と考察

3.1 翻訳プロセスの概観

協力者が共通してこだわる箇所は、主に以下の 6 点であった。

- (1) 第 4 連の 1、2 行目 (全体の 25、26 行目) の In secret we met-/In silence I grieve の訳し方
- (2) 2 行目 (25 行目) grieve と 3 行目 (26 行目) that の繋がり
- (3) 3 行目 (27 行目) heart と 4 行目 (28 行目) spirit の違い
- (4) 5、6 行目 (29、30 行目) If I should meet thee / After long years の訳順
- (5) 8 行目 (31 行目) の With silence and tears の理解
- (6) 同 With silence and tears と、第 1 連 2 行目 In silence and tears との関係

このうち本稿では、主に 1 点目の In secret we met-/ In silence I grieve の箇所に焦点をあてて論じることにする。なぜなら、この箇所についてのデータが最も豊富であり、また、詩の翻訳に顕著な葛藤が記述されると考えられるためである。

3.2 In secret we met—/ In silence I grieve をめぐって

協力者の気づきは、大きく分けて2種類であった。ひとつは、内容理解に関するもので、語の意味や文の構造など、表面的な気づきである。もうひとつは、訳し方やテキストの解釈にかかわるもので、より深い段階の気づきである。以下では、協力者による具体的な発話を挙げ、どういった気づきが生じているのかをまとめる。なお、発話例においては、該当箇所における発話の意図が分かるよう、調査者の発言をあわせて提示し、AからFまで6名の協力者の発話にはそれぞれ通し番号を付した。

3.2.1 理解

訳すためには、そのテキストを理解する必要がある。協力者の発話から、本稿で論じる箇所において理解が困難であったのは、grieve という語の意味と、2、3行目 grieve that のつながりの2点であった。

grieve の意味については、(1) の例に示されるように、辞書を用いて解決されることが多かった。

(1) A4

調査者：そのあと2文目、In silence I grieve まで読んだ後に、そこでまたちょっと読んだ後に考えてるんだけど、2文目読んだ後は、何を考えているんですか？

協力者：grieve の意味がちょっと分からなかったので、どういう意味かなって推測しようと思ったんですけど、まあ、でも辞書を引こうかなと思いました。

that の機能に関しては、以下(2)の例に示されるように、まず文になっていることに気づくことが第1歩である。文の途中での改行によって、文の繋がりが理解しにくくなっているが、grieve that の繋がりに気づくと、内容が把握される。

(2) F2

調査者：1番最初、書き始める前に、「私」からのところ、なんか、考えてから、こう1番最初のところ、何考えていたか教えて下さい。

協力者：えー、その、流れ、本文の流れを掴んでいなかったんですけど、ま、だいたい、分かってから、一気に訳していこうと思ったので、その、この、なんて言うんですかね、まず、これ文になっているっていうのを気づかなくて、こう、センテンスになっているっていうのを、そんなときに、それを考えて、こう見て、考えてたのと、本当にちょっと意味がよく分からなかったのと、で、はい。

D5

調査者：と、またその2行だけ読むのかな、In secret we met In silence I grieve
まで読んだ後で、また少しこう考えているんだけど、今度は何を考えて
いるんですか？

協力者：と、これ、どこ？

調査者：2行目から3行目に行くまでのところ。

協力者：あ、えと、この、That 始まっていたから、んちよつと、ここ[grieve]、
繋げようと思って、戻ってまた考えました。

調査者：あ、なるほど、この That 以下が grieve と繋がって？

協力者：はい。

3.2.2 解釈と訳

先の内容理解の段階を経て、解釈や訳に関する葛藤が生まれる。この段階で言語意識が刺激され、訳す際のこだわりが生じるようであった。以下では「イメージの言語化」、「テキストジャンルと文体」、「原文との対応」、「訳文の一貫性」という4つのキーワードを手がかりに、協力者がどういったことを考えていたのかをまとめる。ただし、先にも述べたように、データとなる協力者の内観報告からカテゴリ化を行ったため、それぞれの境界は曖昧であり、互いに関連しあっているという点には注意が必要である。

<イメージの言語化>

訳出に際して協力者は、イメージを言葉にすることに腐心する。その際、自分の理解をうまく表現できないもどかしさを持ちながら、より適切な訳語を探して行く。そうした葛藤の様子は、以下(3)に挙げられた例からうかがえる。

(3) B62

調査者：「だろうか」って書いて、もう一回頭に戻ってきます。そこで頭に
戻ってくるときは、何を考えているんですか？

協力者：頭に戻ってくるときは、まあ最初の In secret we met がまあ訳が決ま
ってない、なんかイメージとしては分かってたんですけど、なんか言葉
が出てこない、なあ、と思って、飛ばしてたとこ、でまあ、はい。

A20

調査者：その次の文、かな、「静かに」って書く前、に、ちょっと迷っている
ところがあるんだけど、そこでは何を考えているんでしょうか？

協力者：と、ここでは、ど、I grieve、を、え、関連づけたときに、「静かに悲
しむ」ってのもちよつとおかしいな、と思いながらも、書いてしまっ
たので。

B27

調査者：で、それを、「私は影で深く悲しんでる」って直してる、うん、そこは何を考えてるんですか？

協力者：「静かに深く悲しんでる」っていう表現が気に入らなくて、その時に思いついたのがこっちで、でこっちのがいいや、と思って、ここにしています。

D16

調査者：そのあと、「深く悲しむ」と2行目の終わりまで書いて、そこで次3行目に行くまでに少し考えてますけど、ここは何を考えていますか？

協力者：え、えっと、なんか、んーと、なんか、どういうふうに書いたら、変な感じじゃなくなるだろうって、違和感っていうか、訳してる違和感みたいなやつが、あったんで、どうしようかなーって思いながら、たぶん、止まっています。

ここに挙げたような、理解したイメージがことばにならないというもどかしさは、次の(4)に挙げられた例のように、「響きがいい(E14)」や「こっちのがいいや(B24)」という判断によって決着がつけられるようであった。こうした理由は直感的なものであることが多く、内観によって報告されることが少ないが、それでもいくつかの表現の候補を比べたり、前後の関係を考えたりしながら、適切な表現を選び取ろうとしている葛藤の様子が記述された。

(4) **E14**

調査者：で、その後、1行目の、*In secret we met* の方の訳で、「黙って悲しむ」だったのかな？

協力者：*In secret* あ、*In silence* ですか？

調査者：あ、ごめん、*In silence* か、「黙って悲しむ」だったのに、それを「静かに悲しむ」、かな、に直してるんだけど？

協力者：これも、あの、日本語、の訳を意識して、「黙って悲しむ」よりも、「静かに悲しむ」の方が響きがいいかなと思って、変えています。

B27

調査者：えっと、その後2行目、また、「私は」？

協力者：これ最初は「静かに深く悲しんでる」って書いてた。

調査者：で、それを、「私は影で深く悲しんでる」って直してる、うん、そこは何を考えてるんですか？

協力者：「静かに深く悲しんでる」っていう表現が気に入らなくて、そのとき思いついたのがこっちで、でこっちのがいいや、と思って、ここに

しています。

A16-17

調査者：その後、清書のほうに移るんだけど、そこで、こう、なんていうの？

清書に移っているときには、なんか考えていることってありますか？

協力者：清書、この **In secret** どう訳そうかなって、思ったのを、そのまま、あの、こう訳そう、どう書こうって、思って。

調査者：その後、「我々が」って書いた後、で、ちょっと止まって考えているんだけど、ここでは何を考えていますか？

協力者：と、その、また **secret** を、「こっそりと」って書くか、「ひそかに」って書くかで、弱冠、迷ってます。

こうした場面でよく用いられた方略は、辞書の使用であった。協力者たちは、未知語を調べるなど、内容理解のための辞書使用以外に、イメージどおりの訳語を探したり、知っている語をよりよく理解したりするために辞書を引くことがあった。例えば (5) の協力者 F19 の発言は典型的である。そこで協力者は、**in** の訳を考えるにあたり、**in** の既知概念である「中に」では納得いく訳ができなかったため、辞書を参照し、自身の **in** の概念を拡大しようと試みている。同様に B47-49 や E46-47 の例でも、**secret** や **meet** といった既知語を、英和辞典や英英辞典を用いて複数回参照している。こうした行為によって、テキストから読み取った自身のイメージを、なんとか適切な言葉で表そうとしている。さらにこうして考えたり辞書を参考にしたりして得た表現を、文脈に戻って検討し、少しずつ自分のイメージに沿うような訳文を形成していくのである。

(5) **F19**

調査者：えっと、そのあと、清書のほうで、「私たちは静かでそして深い悲しみ」まで書いて、で、辞書を引くんだけど、これは何を考えているところ？

協力者：ここは、**in** の訳を探していました。

調査者：あ、じゃあ **in** を調べているの？

協力者：はい、あの、with 的な意味がないかな、と思って。けど、なかったんですけど。

B47-49

調査者：もう 1 回また頭に戻って、**In secret we met** って読んで、で今度は **secret** を辞書で引きますが、ここでは何を考えているんですか？

協力者：んー、これもまた訳探しですね、**secret**。

調査者：辞書を、こう、**secret** をこうしばらく探してから、もう 1 回 **In secret we**

met を読んでみるんだけど、ここでは何を考えていますか？

協力者：なんか、理想に合うのがなかったなあと思って、はい。

調査者：うん、このあと、「こっそり」っていう自分の訳の下に、「内緒」って書いて、で、素早く消すんだけど、ここは何を考えていたの？

協力者：これは、secret で、なんか、秘密とか、内緒、とかって感じなんで、で、「内緒で出会った」にしたらどうだろうと思ったけど、「内緒」だったら、本当に誰かに隠れて、なんか、他人の存在が感じられて、それだったらまだ「こっそり」の方がいいや、と思って。

E46-47

調査者：と、もう 1 回、第 3 連を読み終わった後に、もう 1 回辞書を引くんだけど、英和で、secret かな、ここは何を考えているのかな？

協力者：ここもやっぱり、文脈を考えた上で、じっくりこなくて、でちょっとこだわりたかったんで、

調査者：なるほど、その、「こっそり」じゃないんだ、って。

協力者：そうですね。

調査者：で、secret をひいたあと、今度は meet をもう 1 回ひいているんだけど、ここは？

協力者：これも、やっぱり、その、secret のときもそうだったんですけど、最初、英英で調べたときに、1 個しかなかったんですよ、でも辞書が違ったら、もしかしたら、意味が増えていることもあるかなって思って、で、調べました。

<テキストジャンルと文体>

当該箇所を訳すにあたり、協力者から得られた発話には、詩という形式についての言及が多く含まれていた。例えば (6) の A3、A21、B2 の例などである。これらの例では、詩の形式であるために、言葉遣いや表現の仕方、文の構造に注意を払おうとしている様子を読み取ることができる。

(6) A3

調査者：そのまま、1 文、In secret we met まで読んだあとに、またそこでちょっと考えているんですけど、ここでは何を考えていますか？

協力者：あ、これ、これ終わった後ですか？これ、普通に、「ひそかに会って」って訳していいものなのか、それとももっと詩的に、訳し方あるかなあって。

A21

調査者：その行で、え、「静かに私は深く悲し」、って書いた後、に、ちよっ

と考えるから、そこを消しているんだけど、ここは何を考えているんですか？

協力者：えと、もうちょっと詩的に訳そうと思って、で、「深く悲しんでいました」っていうよりも、「深い悲しみにおそわれていました」っていうほうが、詩っぽいかなって思って、で。

B2

調査者：1行目、*In secret we met* の文のところ、*we met* のところを何回かこう、読み直しているんだけど、そこでは何、何を考えているんですか？

協力者：この読み直しているところ、あー、これは、*we met* を読み返してるというより、*In secret* を、の訳をずーっと考えていて、なんか、密会、みたいな感じだけど、なんか、もっと詩らしくならないかなあとと思って、考えていました。

C4

調査者：そのあと日本語を書いていくんですが、「ひそかに私たちが」、えー、「会ったとき」、ですかね、「私たち」で、ちょっと立ち止まって、で、「会ったとき」って書き出すのかな、ここは、何を考えているんですか？

協力者：うーん、「会った」って、あまりに、なんか、あまりに日常会話だなと思って、文語でなんかあるかなと思ったんですけど、全くその時には思いつかなかったの、ま、はい。

こうした箇所において「詩らしさ」への言及が多くみられた大きな理由は、以下(7)に示されるように、原文の1行目 *In secret we met* と2行目の *In silence I grieve* が平行的な構造になっているからであると考えられる。こうしたテキストの持つ特徴が、協力者の訳の態度の決定に影響を与えている。また、ここでの文構造の平行性は、今回の協力者のような、文学を専門としない読者にとっても気づかれやすく、その結果、訳すときにこだわるきっかけとなるのではないかと考えられる。なお、詩特有の改行や句読法、音やリズム、脚韻なども、このテキストにおいて顕著であったが、これらの点は今回の調査の中では言及されなかった。

(7) **B3**

調査者：その次の2行目、*In silence I grieve* の *silence* と *grieve* の間に、こう、スラッシュを入れるんだけど、ここでは何を考えているんですか？

協力者：ここは、*In secret we met* と、こう、同じような形だなあとと思って、で、*silence* では *grieve* してて、*secret* では *met* してて、で、ああなるほど、と。

D2

調査者：1文目、なんだけど、1文目を読むのに、けっこうゆっくり読んで、inに丸を付けたりとか、あとweの前にスラッシュを入れたりしているんだけど、ここ、1文目を読んでる時には何を考えているんですか？

協力者：えと、自分で読んでいるときは、なんか、2文目と似ているから、なんか、繋がっているのかなとか思って、なんか、ちょっとゆっくり読みました。なんか、比べながら、はい。

＜原文との対応＞

翻訳とは一般的に、起点テキストを目標文化において再構築する試みであるといえる。そのため協力者は、基本的には原文に沿って、忠実に訳そうとする。しかし、時には自分の伝えようとすることを優先して、原文にない表現を用いる決断を下すこともある。ここで、自分の伝えたいイメージを分かりやすく伝えるため、自然でこなれた訳文を産出することと、原文の形式に忠実に訳そうとするの間で、葛藤が生じる。具体的には、以下の(8)に挙げられているように、例えば時制の変更(B51)、語の挿入(C5)、品詞の変更(E3)、語順の変更(F5)、ダッシュ(B26)や句読点(A22)など、様々な箇所において、原文との対応について葛藤が生じているようであった。こうした翻訳における原文志向と訳文志向の葛藤をきっかけに、テキストを細かく読み返したり、自らの訳文を修正したりしながら、少しずつ折衷的な解決策を探っていくのである。

(8) **B51**

調査者：その後、3、いや、2行目の、訳を、「悲しんでいる」で、「る」に直しているのかな？

協力者：「る」ですね、前、「いた」だったので。

調査者：「た」を「る」に直しているのか、それは、何を考えているんですか？

協力者：と、やっぱり、えーっと、詩だから、そろえたいなあとあって、「こっそり出会った」、「陰で悲しんだ」、にしたんですけど、これよくみたら過去形じゃないから、これ、出会ったのは過去の話だけど、悲しんでるのは、今の話か、とあって、訳を変えました。

E3

調査者：えと、2文目、In silence I grieveのところ、読んで、「静か」、あ、違うね、えっと、悲、黙って、か、「黙って」、って書くときにちょっと考えているんだけど、ここでは何を考えているの？

協力者：ああ、なんか、適訳はどっちかな、とあって、その、In silenceって聞いたら、その、「黙って」っていう副詞なのかな、と思ったんです

けど、しばらくして、なんか、日本語としてよくないかなって思って、少し、いい日本語にしようと思って、はい。

C5

調査者：あと、「会った時」、にして、その、「時」の下、自分の訳の下にこう、線を引いているんですけど、ここは何を考えているんですか？

協力者：時ってというのが、書いてないから、この文章に、で、よかったかなっていうのを、もう一回読んだときに、こう、やってたら、ま、直そうと思って、暫定的な感じですよ。

F5

調査者：えーっと、1回「静か」って書いて、消して、もう1回読み直すんだよね、で、結局また「静かな」って書いているんですけど、

協力者：あー、はい。

調査者：ここでこう、1回消しているのって、何を考えているの？

協力者：Iを主語にしたほうが、分かりやすいかなと思って、私は、なんとかかんとかで、こっち[In silence]を最後にしたほうが分かりやすいかな、と思ったんですけど、でもやっぱりこっち[Inを先に訳す]の方がいいかなと思って、こっちにしました。

F7

調査者：「悲しみと」を辞めて、「悲しみの中で」に直すんですけど、ここは何を考えてここは修正をしたの？

協力者：と、これは、with、あの with っぽく訳そうかなと思ったんですよ、悲しみと共にあった、みたいな、で、そのほうが、しっくり、自分の中ではきたんで、でもやっぱり、in に with だと、やっぱりおかしいかな、と思って、で、直して。

B26

調査者：えー、「こっそり出会い」のところ、「こっそり出会ったー」、ダッシュ、で、直しているんですけど、そこでは何を考えていますか？

協力者：んー、ま、過去形、に、して、で、ダッシュの効果思い出せないけど、何かあるんだろう、と期待しつつ、書き写しました。

A22

調査者：「おそわれていました」って書いた後に、ちょっと、えと、こう考えてから、こう、点って打つんですけど、そこでは何を考えているんですか？

協力者：えと、こっち[原文]が、カンマ、なので、点にするべきか、でもた、
って日本語で終わっているから、丸にするべきかで迷っていました。

<訳文の一貫性>

翻訳の過程において、訳語の修正は不断に行われる。その際に留意されるのは、文体の一貫性、あるいは全体の統一感であった。例えば (9) に示される A33 では、後半の meet の訳を「逢う」という漢字を用いたため、1 行目の met の訳語を、「会う」から「逢う」に変更していた。また D14 では、結局妥協をしながら書き進めていくことになるのであるが、その際にも、1 行目に書いた訳を参照しながら決断を下している様子が記述された。

(9) A33

調査者：そのあと、1 行目に戻って、「ひそかに会っている」の「会う」って
いう漢字を書き直しているんだけど、ここでは何を考えていますか？

協力者：と、えーっと、この、ここ[If I should meet thee の訳]で「お逢いする」
って書いたので、やっぱり 1 行目もあわせて、うん、しようと思って。

D14

調査者：そのあと 2 行目、「静かに」まで書いて、そこでもまた少し時間をあ
けて考えるんだけど、ここは何を考えていますか？

協力者：ここも、なんか、なんか、きれいにいきたいなと思ったけど、でも、
あー、どうしよう、と思って、まあ、1 行目もこう書いたし、もうこ
れでいいかなあ、みたいなことを考えていました。

C11

調査者：そのあと、3 行目の訳のところ、「汝」っていうふう書き出して、
で、2 行目のところ、の、「我」、あ、「私は」のところを「我」に直し
たりとか、あと一行目の we の「私達の」ところを「我ら」に直すん
だけど、ここでは何を考えていますか？

協力者：あ、さっきの辞書は thy でしたね、で、汝で調べて、あ、思いつきり
文語だなと思って、で、じゃあ私じゃなくて我にしようと思って。

この (9) C11 の例から読み取れるように、協力者 C は、途中で Thy という語を訳すにあたり、辞書を参照し、「汝」という語を採用し、その後、前の部分に戻って訳し直した。さらにここで決定された文体は、この後の訳語の選択にも影響を与えている。それが以下の (10) の例である。ここで示されるように、訳文全体の統一感や一貫性を意識しながら訳していくことになる。

(10) **C40-41**

調査者：そのあと、しばらく考えてから、今度は 1 行目の訳のほうに戻ってくるんだけど、ここでは何を考えているんですか？

協力者：えっと、保留していた、「かも」とか、そのへんのあたりを直さないといけないなって思って、戻って。

調査者：1 行目の訳、「会ったとき」っていうのを、「会いしとき」って直すんだけど、ここでは何を考えているんですか？

協力者：えーっと、高校の頃の古文のことを思い出して、で、過去形はけりとしがあったな、とか、そういう感じですね。

3.3 詩の翻訳の特徴

これまでで述べたように、協力者は、ある程度共通する箇所に対して、同じような気づきを生じさせていた。中でも第 4 連の冒頭の箇所については、意味的な対比に伴う、リズム、音韻、文構造の形式的な平行性によって、詩的要素が強い部分である。In secret と In silence の平行性、また、we met と I grieve の対比について、それらを考慮しながら訳すことになった。つまり、この 2 行がその「詩らしさ」によって前景化され、協力者は訳の過程で立ち止まり、検討せざるをえなかったといえることができる。実際にはうまく具現化されなかったり、妥協したりすることもあったが、少なくともその文体的な特徴に気づき、また理解と訳出の間の葛藤を経て、個々の協力者が自分なりの訳を生み出していく様子は記述されたといえるだろう。

また、忠実さへの志向や文体への意識も、詩の翻訳に顕著な特徴であると考えられる。当然訳す際には、日本語として自然でかつ内容を分かりやすく伝えるような日本語を産出する必要があり、協力者たちもそうした意識を持って翻訳に取り組んでいた。しかし同時に、原文の一語一語や、改行、語順なども考慮しながら、忠実に訳そうとする様子が記述された。また、詩らしさへの言及や、文語的な表現への配慮などに代表されるように、文体への注意も多くみられた。

このように、詩の翻訳という活動の中で、詩らしさや言語形式について気づき、また言葉にすることの難しさや訳出における葛藤が生じることが記述された。こうした葛藤を通して、協力者たちは、自身の読みや理解、さらには既存の言語知識を再認識することを迫られる。そうした言語そのものを扱う活動により、言語意識が高まり、ひいては言語感覚を豊かにすることが期待されるのである。

4. まとめ

本稿では、詩を訳すという活動について、そのプロセスを記述的に明らかにした。具体的には、本稿で扱った詩の特徴のひとつである In secret we met と In silence I grieve における文構造と音の平行性と、学習者の気づきや訳出の葛藤について、学習者の言語報告をもとに記述的にまとめた。協力者たちは翻訳の訓練を受けていない大学生であったために、たしかに実際の訳文にはうまく具現化されなかったり、あるいは妥協

して訳したりすることもあったが、それでも、詩を訳すという活動の中で、丁寧に読み、深く考えている様子が明らかとなった。そうした意味で詩は、その翻訳過程で学習者に翻訳の難しさや葛藤を感じさせ、ことばにこだわるきっかけを与えるテキストであるといえるだろう。

本論で記述されたように、テキストの詩らしさに気づいたり、文体や形式の特徴を意識して読み、訳したりすることは、詩を訳す活動の特徴であると同時に、英語教育における翻訳活動の利点であると考えられる。訳文の分かりやすさと原文への忠実さの間での葛藤は、翻訳という行為そのものについて考え、さらに日本語と英語の違いに目を向けることになる。こうした詩を訳すという言語そのものを扱う活動により、学習者の言語意識が高まり、ひいては言語感覚を豊かにすることが期待されるのである。

今後の課題としては、具体的な提案に向けた指導や評価に関する考察と、協力者の習熟度やテキストジャンルの違いによる翻訳プロセスの違いの検討という2点が挙げられる。一般に教育現場では、詩などの文学的なテキストは、難易度が高いと考えられがちであるが、例えば教師の発問やペアやグループでの活動などの指導上の工夫によって、また、語彙的な難易度の低いテキストや文体的な特徴が顕著なテキストを選択するなどの教材の工夫によって、中学校や高等学校などのレベルでも応用可能であろう。また、詩を訳すという活動についても、新聞記事などの説明的な文章を訳す活動とどの程度異なるかといった観点からの検討が必要であろう。こうした課題についてさらに考察をすすめることにより、英語教育における文学的なテキストの扱いや、翻訳活動について、建設的な議論が可能になると考えられる。

【著者紹介】

石原知英 (ISHIHARA Tomohide) 広島大学大学院教育学研究科博士後期課程在籍中。専攻は英語教育学。英語教育における文学や翻訳の扱いに関する研究を行っている。

連絡先 tomoishihara@hiroshima-u.ac.jp

【参考文献】

- Byron, G. G. "When we two parted" (尾島庄太郎. (1964) 『新しい英詩の鑑賞』(pp. 77-78). 北星堂書店 所収)
- Garner, R. (1988). Verbal report data on cognitive and metacognitive strategies. In C. E. Weinstein., E. T. Goetz., & P. A. Alexander. *Learning and study strategies: Issues in assessment, instruction, and evaluation* (pp. 63-76). San Diego: Academic Press.
- Reiss, K. (1981/2004). Type, kind and individuality of text: Decision making in translation. (Kitron, S. Trans.) In Veniti, L. (Ed.), *The translation studies reader* (2nd ed., pp.168-179). London: Routledge.

- Sasaki, M. (2000). Toward an empirical model of EFL writing process: An expository study. *Journal of Second Language Writing*, 9, 259-291.
- Zabalbeascoa, P. (1997). Language awareness and translation. In L. van Lier & D. Corson (Eds.), *Encyclopedia of language and education, volume 6: Knowledge about language* (pp. 119-130). Dordrecht, The Netherlands: Kluwer Academic Publishers.
- ビューラー, K. (脇坂豊、植木迪子、植田康成、大浜るい子 (訳)) (1934/1983) 『言語理論 言語の叙述機能 (上)』. クロノス.

<付録>

1 協力者の訳例

私たちはこっそり出会った。
私はかげで、深く悲しんでいる。
あなたに忘れられてしまうかもしれないことを。
あなたにだまされたことを。
もし私が何年も先にあなたに出あったなら、
私はどうやってあいさつすればいいだろうか？
だまって、泣きながら、だろうか。 (協力者 B)

密かに我らが会いしとき
静かに我は悲しむ
なんじの魂はあざむき
なんじの心は忘るべきやと。
幾年かの後
たとえ我がなんじに会おうとも、
いかにしてなんじを迎えよと？
沈黙と涙とともに。 (協力者 C)

ひそかに私たちは会った
しずかに私は深く悲しむ
あなたの心が私を忘れ、あなたの精神が私を裏切ってしまうだろうことを。
もし、ずっとずっと先に、あなたと会うべきときがきたら、
私はどのようにあなたと言葉を交わせばよいだろう。
無言で、泣きながら。 (協力者 D)

2 課題テキスト（破線部が翻訳課題範囲）

1 When we two parted
 In silence and tears,
 Half broken-hearted
 To sever for years,
 5 Pale grew thy cheek and cold,
 Colder thy kiss;
 Truly that hour foretold
 Sorrow to this.

The dew of the morning
 10 Sunk chill on my brow—
 It felt like the warning
 Of what I feel now.
 Thy vows are all broken,
 And light is thy fame:
 15 I hear thy name spoken,
 And share in its shame.

They name thee before me,
 A knell to mine ear;
 A shudder comes o'er me—
 20 Why wert thou so dear?
 They know not I knew thee,
 Who knew thee too well:
 Long, long shall I rue thee,
 Too deeply to tell.

25 In secret we met—
 In silence I grieve,
 That thy heart could forget,
 Thy spirit deceive.
 If I should meet thee
 30 After long years,
 How should I greet thee?
 With silence and tears.

